

子どもの芸術活動から学ぶ — 図画工作・音楽科における表現活動の教材研究を通して —

前ベルリン日本人国際学校教諭

千葉県柏市立田中小学校教諭 山中 のぞみ

キーワード：在外教育施設、ベルリン、芸術教育、図画工作、音楽科

1. はじめに

ベルリンにある在外教育施設で教員として過ごさせてもらった3年間は、本当に充実した日々であった。社会科学では、博物館ばかりでなく現地の浄水場やリサイクル施設等を訪問することができ、現地の社会状況を子どもとともに学ぶことができた。また芸術教育に携わり、図画工作や音楽科の授業研究も充実したものとなった。ここに、その概略を紹介する。

2. ドイツにおける美術館・博物館等の扱いについて

ベルリン市内の美術館・博物館は、18歳以下の子どもは無料で開放されている。学校の子どもたち向けのプログラムも多様に存在する。教員が引率した場合、教員数名分が無料になることがほとんどであり、校外学習に何度も利用することができた。

2019年11月29日に自然史博物館(フンボルト博物館)へ校外学習に出かけた。たまたまこの日は気候変動対策を求めるKlima Streik(未来のための金曜日)と重なっていた。博物館は、そのストライキに関わる展示や講演を行い、終日無料開放をしていた。プラカードを持ったベルリンの子どもたちが多く集まっていたことがとても心に残っている。

3. ドイツにおける芸術活動について

(1) 3つのオペラ座とベルリン・フィルハーモニーの存在

ベルリンには国立歌劇場に加えてオペラハウスが3つ存在する。加えて、ベルリン・フィルハーモニーという大きな管弦楽団がある。ベルリンで生活する中、これらの芸術に関わる施設をととても身近に感じていた。学校向けの教育プログラムが展開されているため、日本人学校でも毎年利用させてもらっていたからである。ドイツに暮らす子どもたちは、土日になるとファミリー向けの演目を見ることができたり、学校でプログラムに参加したり、観劇・鑑賞をしたりすることができるようになっているのである。

① 国立歌劇場によるオペラワークショップ

子ども向けのワークショップ担当者がプログラムを組み、歌劇場で公演される演目を分かりやすく説明してくれる。気持ちが高まったところで、かつて使われていた衣装を自分で選び、それらを着て役になりきりながら演じるのである。ワークショップを学校がお願いするに当たっての歌劇場からの要請は、オペラのチケットを買うことである。自分たちが興味を持った演目の本物をまた見て、内容を確認することができるというのは素晴らしいことなのではないかと感じる。ワークショップ開催のためにはJETROの方が交渉及び、通訳をして下さっている。ワークショップをするに当たって、学校で事前や事後に話の内容や曲目を学ぶ時間を設けている。2019年度は「魔笛」を行った。登場人物や出てくる楽曲など、子どもたちにとっても分かりやすい演目であると思う。低学年の児童にも何度も曲を聞かせたり、DVDを見せたりして、イメージを広げ

させた。ワークショップを行った後、しばらくたっても、物語に出てくる「おれは鳥刺し」や「夜の女王の Aria」を流せば、「パパゲーノ！！」「魔笛！」などと反応することができるのである。

② ベルリン・フィルハーモニーのゲネプロ・リハーサル見学

第一バイオリニストとして活躍されている日本人の方のご厚意により、見学をさせていただいている。コンサートマスターとして活躍されている方もいる。子どもたちにとって、世界で活躍する日本人のいる場に行けるということもとてもよいことではないかと考える。コンサートマスターとはどういうものなのかということ子どもたちは知ることができるのである。これは本当に貴重なことだと思っている。小学生や中学生がベルリンフィルを見学するのは、とても贅沢な経験である。しかし、子どもたちが1時間続く生の演奏を聴き続けることは難しい。少しでも学びに繋げるために、事前に音楽の時間を使ってオーケストラについて学ばせてきた。音楽の教科書には、学年ごとに鑑賞としての楽器の種類が決まっているが、本校の児童生徒は1年に1回、木管楽器・金管楽器・打楽器、そしてオーケストラの配置について学ぶのである。この活動を通して、様々な楽曲を目や耳を通して聴き、音楽の仕組みをつかむことのできる児童がいることを実感することができた。初めて聴く音楽で、中心となっている楽器は何かを聞くと「ヴァイオリン」と答え、弓をどのように動かしているのかを想像することを楽しむ学習を行うことができたのである。また自分たちの目で見えるオーケストラというものは、楽器だけではなく、指揮者によって作り上げられるオーケストラということを知ることができ、よい経験となっていると感じた。

(2) 学校教育における図画工作の扱い

ドイツ語には「芸術」を表す言葉として、Kunst というものが存在する。Kunst を大学で専攻している学生と出会ったことがあるが、教科としての図画工作とは少し異なるようであり、私が図画工作についてドイツ語を通して説明することに難しさを感じた経験がある。実際、子どもたちは「malen(絵を描く)が好きだ」とか、「basteln(工作をする)」をすると話す。

隣接している現地の小学校を訪問すると、至る所に子どもたちの作品が掲示されている。どの作品もアイデアが面白く、自分も図画工作の授業に取り入れたいと思うものが多くあったので、実際に授業の教材として、いくつか取り入れさせてもらった。ドイツの学校で行われている創作活動は、子どもたちの表現力の高さに感心させられることが多かった。しかし、現地の学校に通わせている保護者からは、日本の学校の子どもの自由な発想力と技能の高さに感心すると言われたことがある。ドイツの学校では、失敗が少ないようにやり方がもう決まっているというのである。「まず始めに～をして、次に～をして、そして」と順序があり、自由な感じは少ないという。本当にそうであるかは分からない。そうなのであっても、その型の中に子どもたちそれぞれの個性が表現されていると思う。

それは、先に挙げた美術館や博物館の扱いや芸術的活動の身近さからくるものと考えることができる。ベルリンの小学校は1年生から3年生までが同じ教室にいるため、個々に合わせた学びをさせることがとても難しい。4年生になるとギムナジウムといった音楽や美術といった専門性が高い学校へ進学する子どもたちもいる。そのような中で、子どもたちの芸術性を高めるのは学校教育ばかりでなく、社会教育や家庭教育が大きく貢献しているのではないかと考えさせられた。

【実践例】

○鉛筆画 「自画像」(小学校高学年)

半分は白黒に印刷された自分の写真。もう半分を様々な濃さの鉛筆を使って描いていく。
絵を描くときの鉛筆の持ち方や陰影の付け方、ぼかし方などをそれぞれが見つけながら描いていた。

○「今の私の好きなもの」(中学年)

横顔を紙に写し取り、カラーペンで今の自分が好きなものを好きなだけ描き込んでいった。細々とした作業であるが、少しずつ進めることが楽しそうであった。

4. ベルリン日本人国際学校における図画工作の指導実践について

(1) 授業形態の特色と課題

児童生徒数が30人を満たない少人数であるということと派遣教員8名の持ち時間などの関係から、音楽・体育・図画工作等の技能教科は複式学習を行っている。それぞれの教科の内容をA年度、B年度と分けて、指導をしてきた。1年生が2年生の内容を行ったり、2年生が1年生の内容を行ったりすることがあるのである。題材によっては道具を扱う能力や表現するための感性が適年齢ではないものがあり、作品を制作するにあたって難しさを感じさせてしまうことがある。また教材を手に入れることや準備することも難しいこともあるため、教科書通りには行えないという現実があった。

折り紙は色が暗く、子どものイメージに合わせにくかった。絵の具はアクリル絵の具が主流であった。水彩絵の具は固形で、低学年児童には扱いが難しかった。木版画は初めての中学年にやりやすい木目のものが見つからず、日本から取り寄せた。高学年になった時に自分の表現したいものを表現するためには、用具を扱う技能が備わっていなければ、子どもたちは創作活動を楽しみながら行うことができない様子であった。絵画・工作・立体・造形・鑑賞をそれぞれの学年で系統的に学び、技能を育てることのできる日本の教科書はとても大切であると実感した。

(2) 現地校との交流授業 中学年「板締め絞り・墨流し」

1年に1度、隣接する現地の小学校との交流授業がある。現地の子が触れ合うことが少ないであろう素材で授業を行いたいという思いがあり、和紙を用いた板締め絞りと墨流しを行うことにした。日本人学校の児童にとっても初めての創作活動である。普段は習字の時間に扱ってきた墨が図工の材料となる面白さを感じさせたいというねらいがあった。墨と似たような性質を持っているマーブリング液を用意し、好きな色が使えるようにした。本校の子どもたちは和紙を扱った活動をするとともに、ドイツの友達とペアになって交流をすることがめあてになっていたため、活動で使える



ようなドイツ語を準備し、事前に練習する時間を設けた。当日、始めはどの子どももお互いに緊張感をもっていたが、次第に作品作りに夢中になっていた。広げた時にできた模様に驚き、自然にお互いほめ合う言葉を掛け合っている姿を見ることができた。墨流しは、どの子どももじっくり静かに和紙の上の墨が花の様に広がる様子を眺めていた。

5. おわりに

美術館や博物館、またオペラやオーケストラといった芸術活動を身近に感じてきた。現地の学校の子どもたちが行うような体験を本校の児童とともに行うことができ、本当に貴重な経験をさせてもらったと思っている。現地の人から芸術教育に関する様々な情報をいただいたことも、とても勉強になった。身近な芸術をテーマにし、毎日が教材研究であった。ドイツの人々が、行事ごとに自分たちで飾り作りをすることが分かった。市内には様々なホームセンターがあり、家の中の家具やものの補修も自分たちで行っていることを知った。

図画工作の教材研究を通して、改めて日本の教科書に載っている題材の重要性にも気づかされた。この3年間、

小学校低学年から高学年すべての図工の授業を持つことができた。前の学年で子どもが習得した技能が、次の学年の表現力に繋がることを実感することができた。

最終年度は、低学年と高学年の授業を受け持ち、そのことを更に大きく感じた。低学年は、技能が十分備わっていないため、表現すること自体を苦手とする子どもがいる。はさみやのりの使い方やクレヨンの特性、絵の具セットの使い方、人の形の描き方など、1年間を通して丁寧に技能を教えながら表現力とともに自信が生まれていくということに気づかされた。一方、高学年児童には技能を教えることはほとんどなかった。作品自体が抽象的なものであるため、自分で課題を理解し、どのように表現したいかを考えなければならない。材料とテーマを与えると自分と向き合いながら作品づくりを黙々と行っていた。高学年の子どもからくる質問は「このように作りたいのだけれど、どのようにしたら効果的だろう」というものであり、こちらは教師の感覚を答える（もちろんそれが正解とは限らないことを伝える）ことがほとんどだった。

本当に貴重な経験が多く、学びの多い3年間だった。子どもたちと一緒に学ぶということの楽しさを感じることができた。ベルリン日本人国際学校において、私の教育活動に協力してくださった先生方、また現地との交流の場を繋いでくださった関係者の方々にも感謝している。